

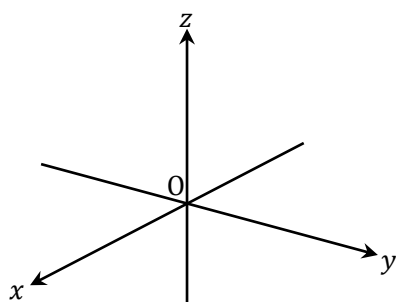
空間ベクトル

§1 空間座標

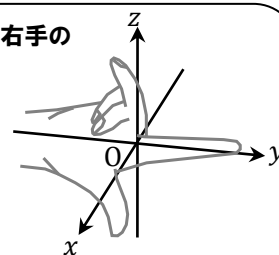
ここでは空間におけるベクトルを学んでいきます。今までとの違いは、ベクトルを扱う舞台が2次元から3次元に拡張されただけで、基本的には『平面ベクトル』で学んだことの繰り返しになります。

○ 空間座標

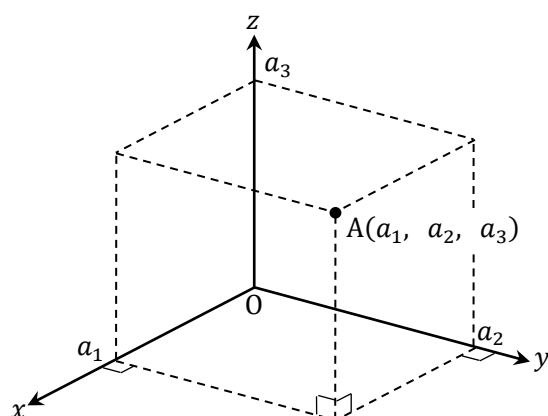
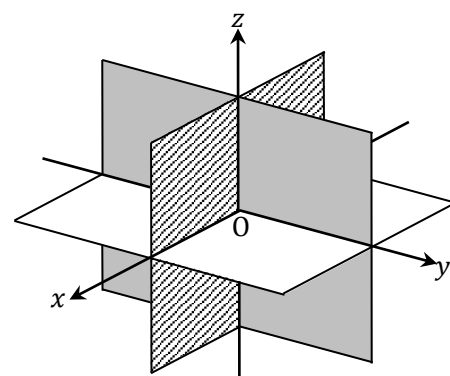
今まで扱ってきた平面の座標は x 軸, y 軸の2本の軸で構成されていましたが、空間の座標は x 軸, y 軸, z 軸の3本の座標軸によって定められます。



空間座標の軸は、一般的に右手の
親指 $\Rightarrow x$ 軸
人差し指 $\Rightarrow y$ 軸
中指 $\Rightarrow z$ 軸
のように軸をつくります。
これを右手系といいます。



また, x 軸, y 軸によって定められる平面を xy 平面(□面),
 y 軸, z 軸によって定められる平面を yz 平面(■面),
 z 軸, x 軸によって定められる平面を zx 平面(▨面)という。



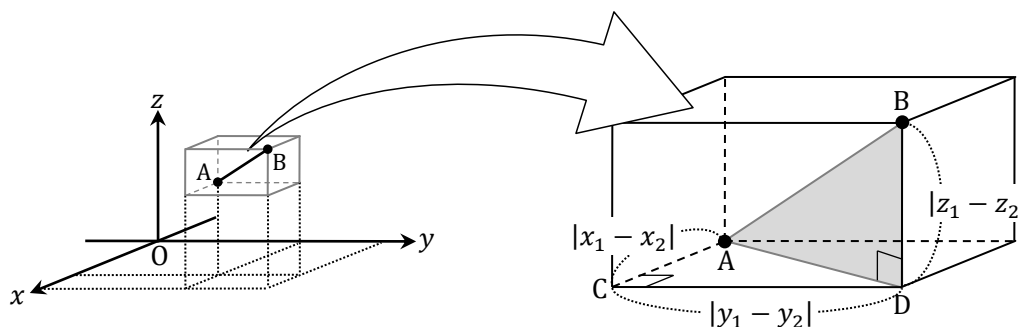
この空間内に任意の点 A を、左図のようにとるとき、
この点の座標は3つの数字を使って

$$A(a_1, a_2, a_3)$$

と表すことができる。

○ 2点間の距離

この空間内に2点 $A(x_1, y_1, z_1)$, $B(x_2, y_2, z_2)$ をとるとき, AB 間の距離を考える。
これは2点 AB を対角線とし, 各辺が各座標軸に平行な直方体を考えるとよい。



$AC = |x_1 - x_2|$, $CD = |y_1 - y_2|$, $DB = |z_1 - z_2|$ より, $\triangle ACD$ において三平方の定理を用いると

$$AD^2 = AC^2 + CD^2 = (x_1 - x_2)^2 + (y_1 - y_2)^2$$

さらに, $\triangle ADB$ において三平方の定理を用いると

$$AB^2 = AD^2 + BD^2 = (x_1 - x_2)^2 + (y_1 - y_2)^2 + (z_1 - z_2)^2$$

よって, $AB = \sqrt{(x_1 - x_2)^2 + (y_1 - y_2)^2 + (z_1 - z_2)^2}$

🎯 2点間の距離 🎯

2点 $A(x_1, y_1, z_1)$, $B(x_2, y_2, z_2)$ 間の距離は

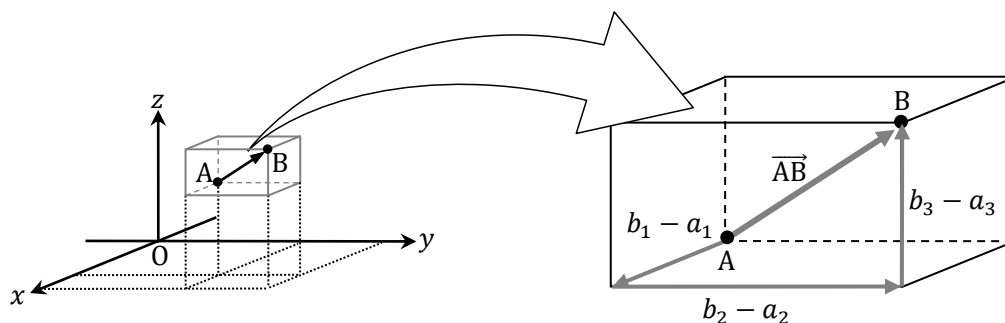
$$AB = \sqrt{(x_1 - x_2)^2 + (y_1 - y_2)^2 + (z_1 - z_2)^2}$$

§2 空間ベクトル

空間内に2点 $A(a_1, a_2, a_3)$, $B(b_1, b_2, b_3)$ をとるとき, ベクトル \overrightarrow{AB} は

$$\overrightarrow{AB} = \begin{pmatrix} b_1 - a_1 \\ b_2 - a_2 \\ b_3 - a_3 \end{pmatrix}$$

と表すことができる。



○ 成分による演算

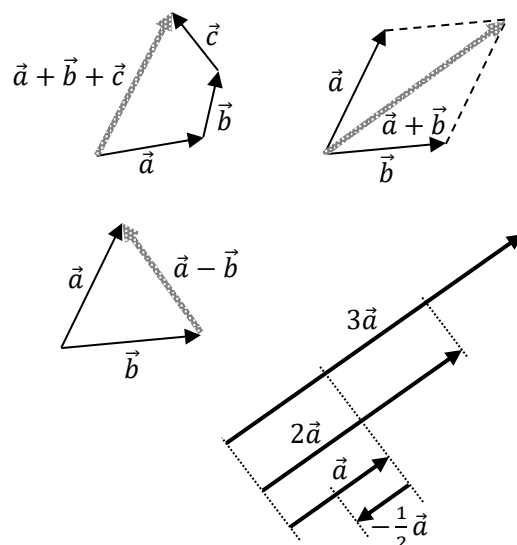
演算の方法自体は平面のときと同様に考える。

$\vec{a} = \begin{pmatrix} a_1 \\ a_2 \\ a_3 \end{pmatrix}$, $\vec{b} = \begin{pmatrix} b_1 \\ b_2 \\ b_3 \end{pmatrix}$ のとき, 2つのベクトルの

和, 差, スカラー倍は次のようになる。

和差 $\vec{a} \pm \vec{b} = \begin{pmatrix} a_1 \\ a_2 \\ a_3 \end{pmatrix} \pm \begin{pmatrix} b_1 \\ b_2 \\ b_3 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} a_1 \pm b_1 \\ a_2 \pm b_2 \\ a_3 \pm b_3 \end{pmatrix}$ (復号同順)

スカラー倍 $k\vec{a} = \begin{pmatrix} ka_1 \\ ka_2 \\ ka_3 \end{pmatrix}$ (k は実数)



○ ベクトルの内積

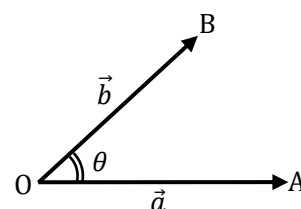
平面のときと同様, ベクトルの内積は $\vec{a} \cdot \vec{b} = |\vec{a}||\vec{b}|\cos\theta$ で定義される。

$\vec{a} = \begin{pmatrix} a_1 \\ a_2 \\ a_3 \end{pmatrix}$, $\vec{b} = \begin{pmatrix} b_1 \\ b_2 \\ b_3 \end{pmatrix}$ のとき, 内積の成分表示は, 以下のようになる。

⊗ 内積の成分表示 ⊗

$$\vec{a} \cdot \vec{b} = a_1b_1 + a_2b_2 + a_3b_3$$

証明に関しては平面のときとほぼ同じである。



§3 位置ベクトル

空間内にある点Aが $\overrightarrow{OA} = \vec{a}$ によって定めるとき、このベクトル \vec{a} を点Aの**位置ベクトル**という。
位置ベクトルが \vec{a} である点Aを $A(\vec{a})$ と表す。

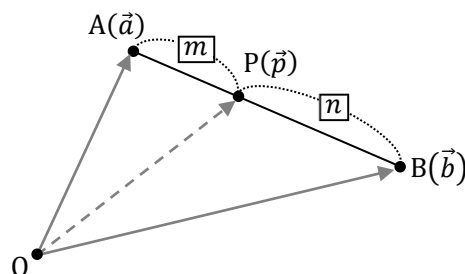
○ 分点の位置ベクトル

分点の位置ベクトルは平面のときと同様に、以下のように表せる。

● 分点の位置ベクトル ●

2点 $A(\vec{a})$, $B(\vec{b})$ に対して、線分ABを $m:n$ に内分する点 $P(\vec{p})$, 外分する点 $Q(\vec{q})$ の位置ベクトル

$$\vec{p} = \frac{n\vec{a} + m\vec{b}}{m+n}, \quad \vec{q} = \frac{-n\vec{a} + m\vec{b}}{m-n}$$



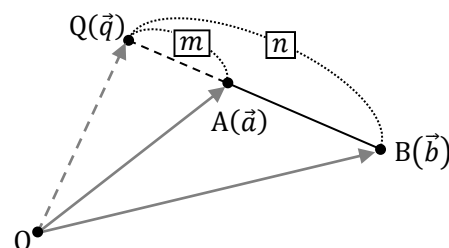
なお、中点の位置ベクトルは $m:n=1:1$ のときなので $\frac{\vec{a} + \vec{b}}{2}$ となる。

また、 $A(a_1, a_2, a_3)$, $B(b_1, b_2, b_3)$ として、成分表示することで内分点P, 外分点Q, 中点Mの座標が以下のように求まる。

$$P\left(\frac{na_1 + mb_1}{m+n}, \frac{na_2 + mb_2}{m+n}, \frac{na_3 + mb_3}{m+n}\right)$$

$$Q\left(\frac{-na_1 + mb_1}{m-n}, \frac{-na_2 + mb_2}{m-n}, \frac{-na_3 + mb_3}{m-n}\right)$$

$$M\left(\frac{a_1 + b_1}{2}, \frac{a_2 + b_2}{2}, \frac{a_3 + b_3}{2}\right)$$



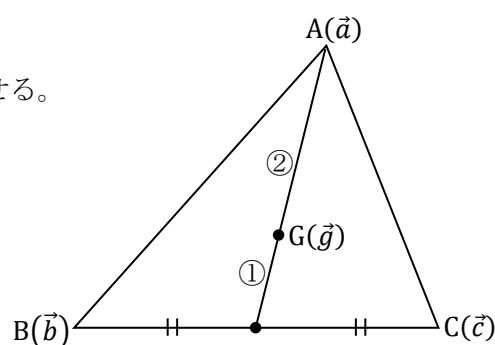
○ 重心の位置ベクトル

重心の位置ベクトルも平面のときと同様に、以下のように表せる。

● 重心の位置ベクトル ●

3点 $A(\vec{a})$, $B(\vec{b})$, $C(\vec{c})$ に対して $\triangle ABC$ の重心Gの位置ベクトル \vec{g} は次のようになる。

$$\vec{g} = \frac{\vec{a} + \vec{b} + \vec{c}}{3}$$



また、 $A(a_1, a_2, a_3)$, $B(b_1, b_2, b_3)$, $C(c_1, c_2, c_3)$ として、成分表示することで重心Gの座標が以下のように求まる。

$$G\left(\frac{a_1 + b_1 + c_1}{3}, \frac{a_2 + b_2 + c_2}{3}, \frac{a_3 + b_3 + c_3}{3}\right)$$



○ 1 次独立

同一平面上にない 3 つのベクトル \vec{a} , \vec{b} , \vec{c} ($\vec{a} \neq \vec{0}$, $\vec{b} \neq \vec{0}$, $\vec{c} \neq \vec{0}$) について, 以下のことが成り立つ。

● 1 次独立なベクトル ●

空間内の任意のベクトル \vec{x} は $\vec{x} = s\vec{a} + t\vec{b} + u\vec{c}$ の形で与えることができ, その表し方は**ただ 1 通り**である。

このとき, 3 つのベクトル \vec{a} , \vec{b} , \vec{c} は **1 次独立**であるという。

証明①

$\overrightarrow{OP} = \vec{x}$, $\overrightarrow{OA} = \vec{a}$, $\overrightarrow{OB} = \vec{b}$, $\overrightarrow{OC} = \vec{c}$ とおく。

点 P を通り, OC に平行な直線と, 平面 OAB との交点を P' とすると,

$$\overrightarrow{OP} = \overrightarrow{OP'} + \overrightarrow{P'P} = \overrightarrow{OP'} + u\vec{c} \quad (u \text{ は実数})$$

とおける。4 点 O, A, B, P' は同一平面上にあるので,

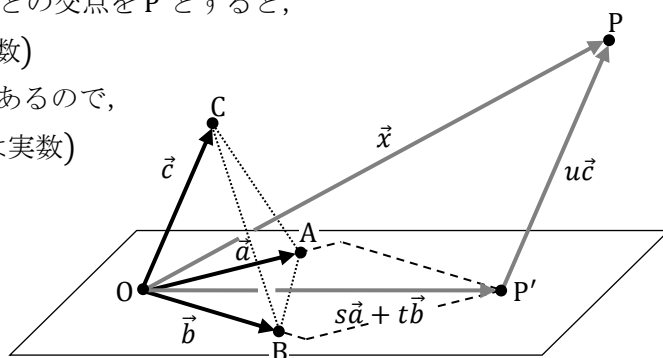
$$\overrightarrow{OP'} = s\overrightarrow{OA} + t\overrightarrow{OB} = s\vec{a} + t\vec{b} \quad (s, t \text{ は実数})$$

となるので,

$$\vec{x} = s\vec{a} + t\vec{b} + u\vec{c}$$

と表すことができ, さらに, s , t の

選び方はただ 1 通りに定まる。



証明②(表し方が 1 通りであること)

\vec{x} が \vec{a} , \vec{b} , \vec{c} を用いて 2 通りに表せたと仮定する。

つまり,

$$\vec{x} = s\vec{a} + t\vec{b} + u\vec{c} = s'\vec{a} + t'\vec{b} + u'\vec{c}$$

と表せたとする。

この 2 つの表示が異なるので, \vec{a} , \vec{b} , \vec{c} の係数の少なくとも 1 つは異なる。

今, それを $s \neq s'$ とすると,

$$\begin{aligned} s\vec{a} + t\vec{b} + u\vec{c} &= s'\vec{a} + t'\vec{b} + u'\vec{c} \Leftrightarrow (s - s')\vec{a} = (t' - t)\vec{b} + (u' - u)\vec{c} \\ &\Leftrightarrow \vec{a} = \frac{t' - t}{s - s'}\vec{b} + \frac{u' - u}{s - s'}\vec{c} \quad (\because s - s' \neq 0) \end{aligned}$$

これは, \vec{a} が \vec{b} , \vec{c} と同一平面上にあることになり矛盾する。

よって, 表し方は 1 通りとなる。

これより, \vec{a} , \vec{b} , \vec{c} が 1 次独立であるとき,

$$s\vec{a} + t\vec{b} + u\vec{c} = s'\vec{a} + t'\vec{b} + u'\vec{c} \Leftrightarrow s = s', \quad t = t', \quad u = u'$$

$$s\vec{a} + t\vec{b} + u\vec{c} = \vec{0} \Leftrightarrow s = 0, \quad t = 0, \quad u = 0$$

が成り立つことが分かる。

逆に, **同一平面内に** \vec{a} , \vec{b} , \vec{c} があるとき, これらは空間内の任意のベクトルを表すことができない。
(\vec{a} , \vec{b} , \vec{c} と同一平面上のベクトルしか表せない。)

このとき, 3 つのベクトル \vec{a} , \vec{b} , \vec{c} は **1 次従属**であるという。

§4 ベクトル方程式

ここでは直線、球、平面上の任意の点を、原点からの位置ベクトルを用いて表すことを目標とする。

○ 直線のベクトル方程式

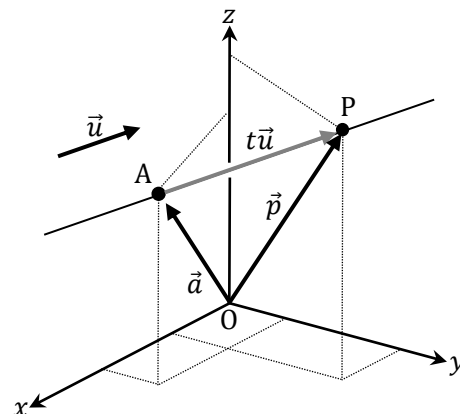
① 点 $A(\vec{a})$ を通り、 \vec{u} に平行な直線

直線上の任意の点を $P(\vec{p})$ とすると、点 P の位置ベクトルは

$$\vec{p} = \vec{a} + t\vec{u} \quad (t \text{ は実数}) \quad \cdots (*)$$

と表すことができる。

\vec{u} のように直線 l と平行なベクトルを **方向ベクトル** という。



直線の方程式

ここで、 $A(x_0, y_0, z_0)$, $P(x, y, z)$, $\vec{u} = \begin{pmatrix} a \\ b \\ c \end{pmatrix}$ とすると、

$$\vec{p} = \vec{a} + t\vec{u} \Leftrightarrow \begin{pmatrix} x \\ y \\ z \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} x_0 \\ y_0 \\ z_0 \end{pmatrix} + t \begin{pmatrix} a \\ b \\ c \end{pmatrix} \Leftrightarrow \begin{cases} x = x_0 + at \\ y = y_0 + bt \\ z = z_0 + ct \end{cases} \quad \cdots (*)$$

(*) は直線の媒介変数表示である。

(*) から t を消去すると、直線の方程式が得られる。

$$x = x_0 + at \Leftrightarrow t = \frac{x - x_0}{a}, \quad y = y_0 + bt \Leftrightarrow t = \frac{y - y_0}{b}, \quad z = z_0 + ct \Leftrightarrow t = \frac{z - z_0}{c}$$

これより、 t を消去すると、 $\frac{x - x_0}{a} = \frac{y - y_0}{b} = \frac{z - z_0}{c}$

空間における直線の方程式

方向ベクトルが $\vec{u} = (a, b, c)$ で、

点 $A(x_0, y_0, z_0)$ を通る直線の方程式は

$$\frac{x - x_0}{a} = \frac{y - y_0}{b} = \frac{z - z_0}{c}$$

② 2点 $A(\vec{a})$, $B(\vec{b})$ を通る直線

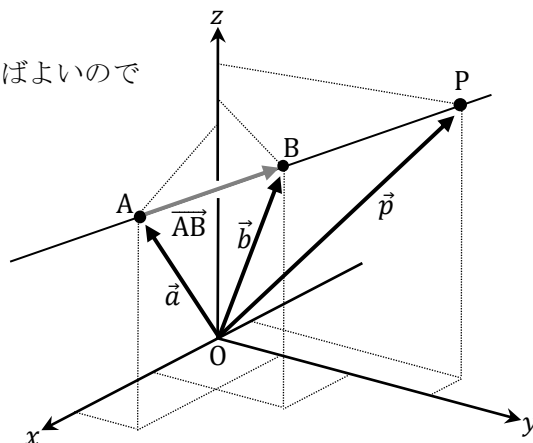
これは $\overrightarrow{AB} = \vec{b} - \vec{a}$ を方向ベクトルとする直線と考えればよいので

$$\vec{p} = \vec{a} + t(\vec{b} - \vec{a}) = (1 - t)\vec{a} + t\vec{b}$$

と表すことができる。また、 $1 - t = s$ とくと、

$$\vec{p} = s\vec{a} + t\vec{b} \quad (s + t = 1)$$

と表すこともできる。



例1 2点A(1, 2, 3), B(4, 5, 6)を通る直線を l とする。

(1) 直線 l と xy 平面の交点の座標を求めなさい。

(2) 点C(-3, 2, 1)を通り, $\vec{u} = (1, 3, 2)$ に平行な直線を m とする。2直線 l, m の交点の座標を求めなさい。

(1) 直線 l 上の任意の点Pとすると,

$$\overrightarrow{OP} = (1-t)\overrightarrow{OA} + t\overrightarrow{OB} = (1+3t, 2+3t, 3+3t)$$

点Pの z 座標が0になるような t の値は, $3+3t=0 \Leftrightarrow t=-1$

これより, 直線 l と xy 平面の交点の座標は $(-2, -1, 0)$

(2) 直線 m 上の任意の点Qとすると,

$$\overrightarrow{OQ} = \overrightarrow{OC} + s\vec{u} = (-3+s, 2+3s, 1+2s)$$

2点P, Qが一致するような s, t の組合せを考えればよいので,

$$\begin{cases} 1+3t = -3+s \\ 2+3t = 2+3s \\ 3+3t = 1+2s \end{cases} \Leftrightarrow \begin{cases} s-3t = 4 \quad \cdots \textcircled{1} \\ 3s-3t = 0 \quad \cdots \textcircled{2} \\ 2s-3t = 2 \quad \cdots \textcircled{3} \end{cases}$$

①, ②より, $(s, t) = (-2, -2)$

これは③を満たす。

よって, 2直線 l, m の交点の座標は $(-5, -4, -3)$

○ 平面のベクトル方程式

空間内に同一直線上にない3点A(\vec{a}), B(\vec{b}), C(\vec{c})があり, この3点で定まる平面を α とする。

ここではこの平面 α のベクトル方程式を考える。

今, 平面上の任意の点P(\vec{p})とすると, 4点A, B, C, Pは

同一平面上にあるので,

$$\overrightarrow{AP} = s\overrightarrow{AB} + t\overrightarrow{AC} \quad (s, t \text{ は実数})$$

と表すことができる。

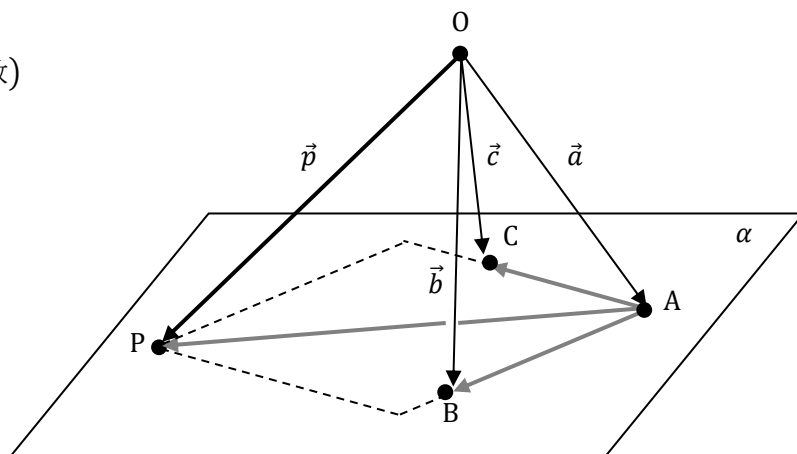
これより, $\vec{p} = \vec{a} + \overrightarrow{AP}$

$$\begin{aligned} &= \vec{a} + s\overrightarrow{AB} + t\overrightarrow{AC} \\ &= \vec{a} + s(\vec{b} - \vec{a}) + t(\vec{c} - \vec{a}) \\ &= (1-s-t)\vec{a} + s\vec{b} + t\vec{c} \end{aligned}$$

$1-s-t=r$ とおくと,

$$\vec{p} = r\vec{a} + s\vec{b} + t\vec{c} \quad (r+s+t=1)$$

と表すことができる。



例2 四面体 $OABC$ において、 OA , OB の中点をそれぞれ M , N とおき、 $\triangle CMN$ の重心を G とする。
直線 OG と平面 ABC の交点を H とするとき、 $OG : GH$ を求めなさい。

まずは、1 次独立の性質を使って解きます。

点 H というのは直線 OG と平面 ABC の交点なので、それぞれの図形上にある条件を立式することで、解くことができます。

解①

$$\overrightarrow{OG} = \frac{\overrightarrow{OM} + \overrightarrow{ON} + \overrightarrow{OC}}{3} = \frac{\frac{\overrightarrow{OA}}{2} + \frac{\overrightarrow{OB}}{2} + \overrightarrow{OC}}{3} = \frac{\overrightarrow{OA}}{6} + \frac{\overrightarrow{OB}}{6} + \frac{\overrightarrow{OC}}{3}$$

$$O, G, H \text{ は同一直線上より, } \overrightarrow{OH} = k\overrightarrow{OG} = \frac{k}{6}\overrightarrow{OA} + \frac{k}{6}\overrightarrow{OB} + \frac{k}{3}\overrightarrow{OC}$$

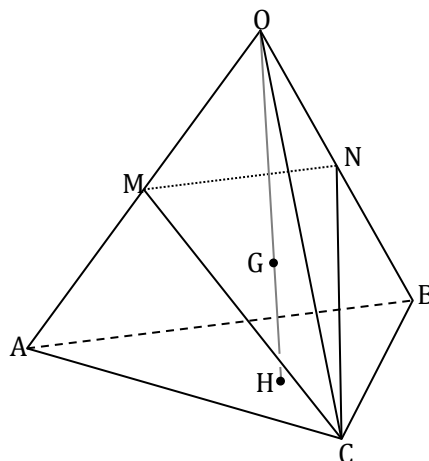
A, B, C, H は同一平面上より、

$$\overrightarrow{OH} = s\overrightarrow{OA} + t\overrightarrow{OB} + u\overrightarrow{OC} \quad (s + t + u = 1 \quad \dots \textcircled{1})$$

$$\overrightarrow{OA}, \overrightarrow{OB}, \overrightarrow{OC} \text{ は 1 次独立より, } s = \frac{k}{6}, t = \frac{k}{6}, u = \frac{k}{3}$$

$$\textcircled{1} \text{ に代入すると, } \frac{k}{6} + \frac{k}{6} + \frac{k}{3} = 1 \Leftrightarrow k = \frac{3}{2}$$

$$\text{よって, } \overrightarrow{OH} = \frac{3}{2}\overrightarrow{OG} \text{ となるので, } OG : GH = 2 : 1$$



係数を足して 1 である性質を使った方が、解答がシンプルになります。

解②

$$\overrightarrow{OG} = \frac{\overrightarrow{OM} + \overrightarrow{ON} + \overrightarrow{OC}}{3} = \frac{\frac{\overrightarrow{OA}}{2} + \frac{\overrightarrow{OB}}{2} + \overrightarrow{OC}}{3} = \frac{\overrightarrow{OA}}{6} + \frac{\overrightarrow{OB}}{6} + \frac{\overrightarrow{OC}}{3}$$

$$O, G, H \text{ は同一直線上より, } \overrightarrow{OH} = k\overrightarrow{OG} = \frac{k}{6}\overrightarrow{OA} + \frac{k}{6}\overrightarrow{OB} + \frac{k}{3}\overrightarrow{OC}$$

$$A, B, C, H \text{ は同一平面上より, } \frac{k}{6} + \frac{k}{6} + \frac{k}{3} = 1 \Leftrightarrow k = \frac{3}{2}$$

$$\text{よって, } \overrightarrow{OH} = \frac{3}{2}\overrightarrow{OG} \text{ となるので, } OG : GH = 2 : 1$$

平面の方程式

平面上の任意の点 P の位置ベクトルは $\vec{p} = \vec{a} + s\vec{AB} + t\vec{AC}$ と表せる。

ここで、この平面の法線ベクトル(平面に垂直なベクトル)を \vec{n} とすると、

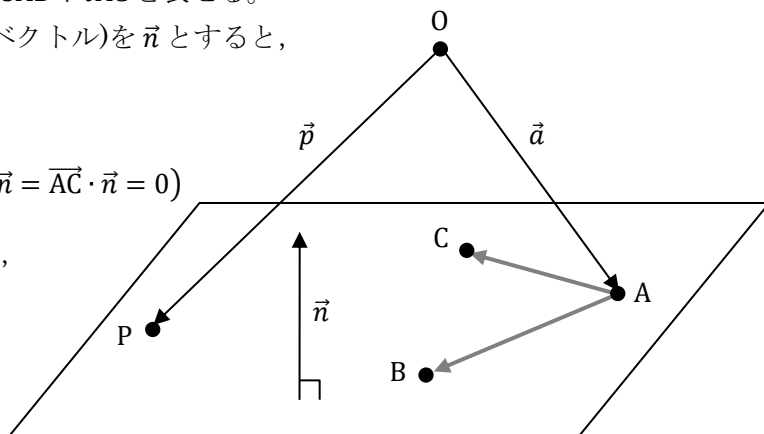
$$\vec{AB} \perp \vec{n}, \vec{AC} \perp \vec{n} \text{ より, } \vec{AB} \cdot \vec{n} = \vec{AC} \cdot \vec{n} = 0$$

これより、

$$\vec{p} \cdot \vec{n} = (\vec{a} + s\vec{AB} + t\vec{AC}) \cdot \vec{n} = \vec{a} \cdot \vec{n} \quad (\because \vec{AB} \cdot \vec{n} = \vec{AC} \cdot \vec{n} = 0)$$

ここで、 $\vec{p} = \begin{pmatrix} x \\ y \\ z \end{pmatrix}$, $\vec{n} = \begin{pmatrix} a \\ b \\ c \end{pmatrix}$, $\vec{a} \cdot \vec{n} = -d$ とすると、

$$\begin{aligned} \vec{p} \cdot \vec{n} = \vec{a} \cdot \vec{n} &\Leftrightarrow ax + by + cz = -d \\ &\Leftrightarrow \boxed{ax + by + cz + d = 0} \end{aligned}$$



これは法線ベクトルが $\vec{n} = \begin{pmatrix} a \\ b \\ c \end{pmatrix}$ である**平面の方程式**となっている。

(参考)

法線ベクトルが $\vec{n} = \begin{pmatrix} a \\ b \\ c \end{pmatrix}$
である直線の方程式
 $ax + by + c = 0$

平面の方程式

法線ベクトルが $\vec{n} = (a, b, c)$ である平面の方程式は

$$ax + by + cz + d = 0$$

例 3 3点 $A(1, 0, 1)$, $B(1, 2, 3)$, $C(-1, 2, 0)$ を通る平面の方程式を求めなさい。

解①

求める平面の方程式を $ax + by + cz + d = 0 \quad \cdots (*)$ とおく。

3点 A, B, C の座標を代入すると、

$$a + c + d = 0 \quad \cdots ① \quad a + 2b + 3c + d = 0 \quad \cdots ② \quad -a + 2b + d = 0 \quad \cdots ③$$

$$② - ① \text{ より, } 2b + 2c = 0 \Leftrightarrow b = -c$$

$$② - ③ \text{ より, } 2a + 3c = 0 \Leftrightarrow a = -\frac{3}{2}c$$

$$\text{よって①より, } d = -a - c = \frac{3}{2}c - c = \frac{1}{2}c$$

$$\text{以上より平面の方程式は, } (*) \Leftrightarrow -\frac{3}{2}cx - cy + cz + \frac{1}{2}c = 0 \Leftrightarrow 3x + 2y - 2z - 1 = 0$$

次に法線ベクトルを用いて、平面の方程式を求めてみます。

解②

求める平面の方程式の法線ベクトルは、 \overrightarrow{AB} , \overrightarrow{AC} に垂直なベクトルとなる。

$$\overrightarrow{AB} = (0, 2, 2), \overrightarrow{AC} = (-2, 2, -1)$$

法線ベクトルを $\vec{n} = (a, b, c)$ とすると、

$$\overrightarrow{AB} \cdot \vec{n} = 0 \Leftrightarrow 2b + 2c = 0 \Leftrightarrow b = -c$$

$$\overrightarrow{AC} \cdot \vec{n} = 0 \Leftrightarrow -2a + 2b - c = 0$$

$$2 \text{ 式より, } b \text{ を消去すると, } -2a - 2c - c = 0 \Leftrightarrow a = -\frac{3}{2}c$$

$$\text{よって, } \vec{n} = \left(-\frac{3}{2}c, -c, c\right) \parallel (3, 2, -2)$$

これより、求める平面の法線ベクトルは、 $(3, 2, -2)$ となるので、

平面の方程式は、 $3x + 2y - 2z + d = 0$ とおける。

これが、 $A(1, 0, 1)$ を通るので、 $3 - 2 + d = 0 \Leftrightarrow d = -1$

以上より、求める平面の方程式は、 $3x + 2y - 2z - 1 = 0$

○ 点と平面の距離

点 $A(x_1, y_1, z_1)$ から平面 $ax + by + cz + d = 0$ に下ろした垂線の足を H とするとき、 AH の長さを **点と平面の距離** といい、次のような関係式が成り立つ。

点と平面の距離

点 (x_1, y_1, z_1) と平面 $ax + by + cz + d = 0$ の距離 d は

$$d = \frac{|ax_1 + by_1 + cz_1 + d|}{\sqrt{a^2 + b^2 + c^2}}$$

(参考) 点 (x_1, y_1) と直線 $ax + by + c = 0$ の距離 d は

$$d = \frac{|ax_1 + by_1 + d|}{\sqrt{a^2 + b^2}}$$

証明①

法線ベクトルを $\vec{n} = \begin{pmatrix} a \\ b \\ c \end{pmatrix}$ とすると、 $\overrightarrow{AH} = k\vec{n} = \begin{pmatrix} ka \\ kb \\ kc \end{pmatrix}$

$$\text{よって, } \overrightarrow{OH} = \overrightarrow{OA} + \overrightarrow{AH} = \begin{pmatrix} x_1 \\ y_1 \\ z_1 \end{pmatrix} + \begin{pmatrix} ka \\ kb \\ kc \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} x_1 + ka \\ y_1 + kb \\ z_1 + kc \end{pmatrix}$$

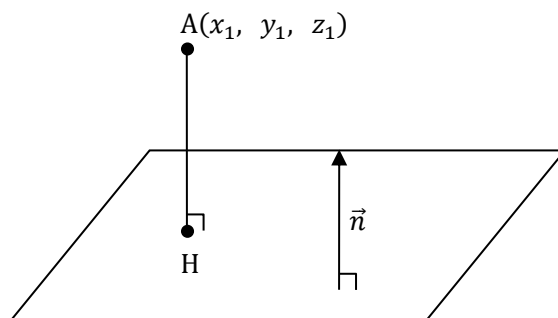
これより、 $H(x_1 + ka, y_1 + kb, z_1 + kc)$ となる。

点 H は平面 $ax + by + cz + d = 0$ 上より、

$$a(x_1 + ka) + b(y_1 + kb) + c(z_1 + kc) + d = 0 \Leftrightarrow k = -\frac{ax_1 + by_1 + cz_1 + d}{a^2 + b^2 + c^2}$$

よって、

$$|\overrightarrow{AH}| = |k\vec{n}| = |k||\vec{n}| = \left| -\frac{ax_1 + by_1 + cz_1 + d}{a^2 + b^2 + c^2} \right| \sqrt{a^2 + b^2 + c^2} = \frac{|ax_1 + by_1 + cz_1 + d|}{\sqrt{a^2 + b^2 + c^2}}$$



証明②(内積の性質を使うと…)

平面 $ax + by + cz + d = 0$ に垂直な単位ベクトルを \vec{n} とすると、

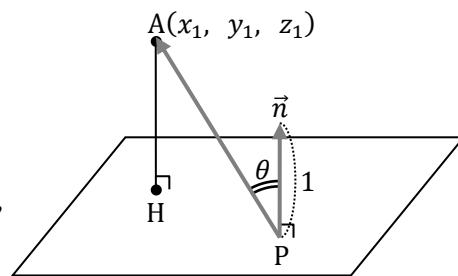
$$\vec{n} = \frac{1}{\sqrt{a^2 + b^2 + c^2}} \begin{pmatrix} a \\ b \\ c \end{pmatrix}$$

平面上に $P(x_0, y_0, z_0)$ をとり、 \overrightarrow{PA} と \vec{n} のなす角を θ とすると、

$$\begin{aligned} AH &= \left| \overrightarrow{PA} \cos \theta \right| \\ &= \left| \overrightarrow{PA} \cdot \vec{n} \right| \\ &= \left| \frac{1}{\sqrt{a^2 + b^2 + c^2}} \begin{pmatrix} a \\ b \\ c \end{pmatrix} \cdot \begin{pmatrix} x_1 - x_0 \\ y_1 - y_0 \\ z_1 - z_0 \end{pmatrix} \right| \\ &= \left| \frac{ax_1 + by_1 + cz_1 - (ax_0 + by_0 + cz_0)}{\sqrt{a^2 + b^2 + c^2}} \right| \end{aligned}$$

点 P は平面 $ax + by + cz + d = 0$ 上より、 $ax_0 + by_0 + cz_0 = -d$

$$\text{よって、} AH = \left| \frac{ax_1 + by_1 + cz_1 + d}{\sqrt{a^2 + b^2 + c^2}} \right|$$

**○ 球のベクトル方程式**

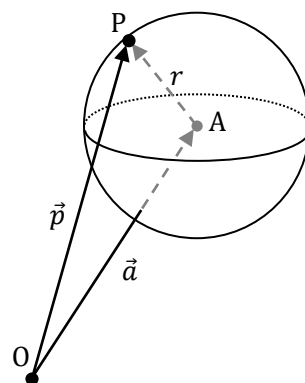
空間において、点 A から距離が一定である点の軌跡は**球**になる。

中心が $A(\vec{a})$ 、半径 r の球面上の任意の点を $P(\vec{p})$ とすると、

球のベクトル方程式は、常に $|\overrightarrow{AP}| = r$ となるので、

$$|\vec{p} - \vec{a}| = r$$

と表すことができる。

**球の方程式**

ここで、 $A(a, b, c)$ 、 $P(x, y, z)$ とすると、

$$|\vec{p} - \vec{a}| = r \Leftrightarrow \left| \begin{pmatrix} x - a \\ y - b \\ z - c \end{pmatrix} \right| = r \Leftrightarrow \sqrt{(x - a)^2 + (y - b)^2 + (z - c)^2} = r$$

両辺 2 乗して、 $(x - a)^2 + (y - b)^2 + (z - c)^2 = r^2$

これは中心 $A(a, b, c)$ 、半径 r の**球の方程式**がとなっている。

● 球の方程式 ●

中心 $A(a, b, c)$ 、半径 r の球の方程式は

$$(x - a)^2 + (y - b)^2 + (z - c)^2 = r^2$$

例 4 球面 $S: x^2 + y^2 + z^2 - 2x - 4y - 6z - 2 = 0$ と xy 平面の交わりは円になる。この円の中心と半径を求めなさい。

解①

$(x-1)^2 + (y-2)^2 + (z-3)^2 = 16$ より、

球面 S は中心 $(1, 2, 3)$ 、半径 4 の球である。

これより、切り口の円の中心は $(1, 2, 0)$ となる。

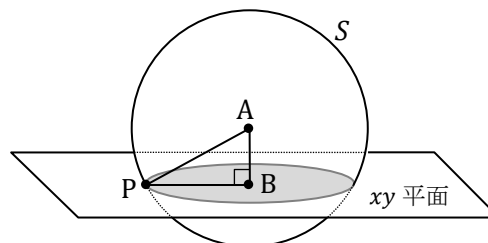
$A(1, 2, 3)$ 、 $B(1, 2, 0)$ とおき、切り口の円の周上の

任意の点を P とすると、 $\angle ABP = 90^\circ$ 、 $AP = 4$ 、

$AB = 3$ より、

$$BP^2 = AP^2 - AB^2 = 4^2 - 3^2 = 7$$

よって、切り口の円の半径は、 $\sqrt{7}$



xy 平面が $z = 0$ という式で表されることを用いても解くことができます。

解②

$x^2 + y^2 + z^2 - 2x - 4y - 6z - 2 = 0$ に $z = 0$ を代入すると、

$$x^2 + y^2 - 2x - 4y - 2 = 0$$

これが切り口の円の方程式となる。

$(x-1)^2 + (y-2)^2 = 7$ より、切り口は中心 $(1, 2, 0)$ 、円 $\sqrt{7}$ の円となる。

例 5 球面 $S: x^2 + y^2 + z^2 - 2x - 4y - 6z - 2 = 0$ と平面 $\alpha: 2x + y - z + 5 = 0$ の交わりは円になる。この円の中心と半径を求めなさい。

本問は斜めの平面による球の切断です。先ほどより少し複雑になります。

$(x-1)^2 + (y-2)^2 + (z-3)^2 = 16$ より、

球面 S は中心 $(1, 2, 3)$ 、半径 4 の球である。

$A(1, 2, 3)$ とおき、切り口の円の中心を B 、周上の任意の点を P

とすると、 $\angle ABP = 90^\circ$ 、 $AP = 4$ となる。

点と平面の距離の公式から、 $AB = \frac{|2 \cdot 1 + 2 - 3 + 5|}{\sqrt{2^2 + 1^2 + (-1)^2}} = \frac{6}{\sqrt{6}} = \sqrt{6}$

これより、 $BP^2 = AP^2 - AB^2 = 4^2 - (\sqrt{6})^2 = 10$

よって、切り口の円の半径は、 $\sqrt{10}$

また、平面 α の法線ベクトルを \vec{n} とおくと、

$$\vec{OB} = \vec{OA} + \vec{AB} = \vec{OA} + k\vec{n} = (1, 2, 3) + k(2, 1, -1) = (2k+1, k+2, -k+3)$$

よって、 $B(2k+1, k+2, -k+3)$

これが、平面 α 上にあるので、

$$2(2k+1) + k + 2 - (-k+3) + 5 = 0 \Leftrightarrow k = -1$$

よって、切り口の円の中心の座標は、 $B(-1, 1, 4)$

